〈資料紹介〉静嘉堂所蔵『目録』（松浦武四郎旧蔵品）について（その1）

吉田 恵理

一、はじめに―静嘉堂が所蔵する武四郎旧蔵品のあゆみ

静嘉堂の創設者、岩崎彌之助（一八五一～一九〇八）は、北海道の名づけ親であり稀代の好古家・松浦武四郎（一八一八～八八）【挿図1】が収集した古物を相当数受け継いでいる。このことは吉田武三『評伝 松浦武四郎』に「出土の土器類の中三十点ほどは、勾玉の首飾を譲られた岩崎家の静嘉堂文庫に蔵されている。」とあり、岩崎家・静嘉堂文庫は武四郎自慢の「大首飾り」の所蔵者として知られてはいた(註1)。とはいえ、約九百点もの考古遺物が、おそらくは武四郎が所蔵していた当時の姿のまま、静嘉堂の蔵に帰していたことが分かったのは最近のことである。

武四郎の没後、東京神田五軒町の武四郎邸に残された品々は、嗣子・松浦一雄（一八五四～一九二八／水戸藩士・加藤木賞三（一八一五～九三）の三男）が受け継いだ。紆余曲折を経て、書斎「一畳敷」は、国際基督教大学に移築保管された。古物・書画・文書類は、最終的に武四郎の郷里である伊勢・松阪市の松浦武四郎記念館（以下、武四郎記念館と略）に寄贈され、二〇〇八年に一括で国の重要文化財（歴史資料）に指定された。これらと同等の古物の一群が静嘉堂に残されていることが判明し、初公開したのが、二〇一三年、世田谷区岡本の静嘉堂文庫美術館での展覧会「幕末の北方探検家　松浦武四郎」（会期：十月五日～十二月八日）であった。

挿図1　「松浦武四郎肖像写真」
明治15～17年頃撮影
松浦武四郎記念館蔵

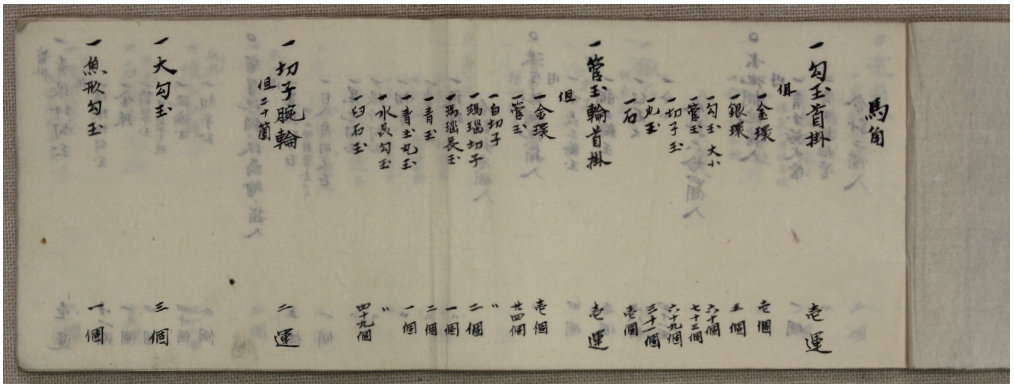
同展開催に尽力された内川隆志氏（当時、國學院大學資料センター准教授）が編んだ『静嘉堂文庫蔵　松浦武四郎蒐集古物目録』（二〇一三年三月、以下、『内川目録』と略）(註2)では、武四郎旧蔵品と判明した八七四点全ての作品資料（収納箱を含む）の実測、デジタルトレース、箱書や付属資料の翻刻、そして武四郎自身が編んだ所蔵品図録ともいうべき『撥雲余興』首巻（明治十年／一八七七刊）、同二集（明治十五年刊）や、重要文化財 河鍋暁斎筆「武四郎涅槃図」（明治十九年、武四郎記念館蔵）に描かれた古物（主として考古遺物）との同定がなされ、大半が今も静嘉堂で保管されていることが報告されている。

これを踏まえ同展では、『撥雲余興』や「武四郎涅槃図」に描かれた古物の実物を展示し、図録『静嘉堂蔵　松浦武四郎コレクション』（以下、『静嘉堂図録』と略）では、著述家としての武四郎が執筆、編集、版行した書籍ほか、約七十件の静嘉堂所蔵武四郎旧蔵品、および十件程度の武四郎記念館所蔵品等をカラー図版と解説によって示し、三種の目録を資料編で示した。一つは『撥雲余興』首巻、同二集のマイクロフィルムからの影印、もう一つは武四郎の生家に伝来し、武四郎記念館が所蔵する『蔵品目録』（以下、記念館本と略）、そして静嘉堂文庫所蔵の『土器目録』の翻刻である。

その後、二〇一八年には、武四郎記念館、三重県総合博物館、北海道立帯広美術館、北海道博物館にて大規模な展覧会「幕末維新を生きた旅の巨人 松浦武四郎：見る、集める、伝える：北海道一五〇年事業松浦武四郎生誕二〇〇年記念」が開催され、静嘉堂文庫美術館でも所蔵品で「生誕二〇〇年記念　幕末の北方探検家　松浦武四郎」展（会期：九月二四日～十二月九日）を開催した。

また二〇二四年には静嘉堂@丸の内を会場に「画鬼河鍋暁斎×鬼才松浦武四郎」展（会期：四月十三日～六月九日）を開催。初めて「武四郎涅槃図」と、そこに描かれた全ての古物の現物（武四郎記念館、静嘉堂に分蔵）を集合させた。加えて記念館本に記載のある書画類より、天神画像類を六幅、阿弥陀来迎図一幅（天神画像一幅は「武四郎涅槃図」画中にあり）（註3）、牡丹花肖柏『北野御縁起』一冊、古写経類五点（三点は『撥雲余興』に掲載）をそれぞれ同定し出品した。特に古写経については、二〇二一年度東京大学史料編纂所との共同調査「静嘉堂所蔵古写経群の研究資源化」（研究代表者・浦木賢治）により、付属資料を含めた現物調査を行い、記念館本とも付け合わせた結果、十四点が武四郎旧蔵品であることが明らかとなった（註4）。その後、古写経類の収納箱「龍宮秘典」も確認することができた（註5）。しかしながら、なぜ静嘉堂がこれほど多くの武四郎旧蔵品を所蔵しているのか、いつ岩崎家の所蔵となったのかなどという問題は未解決のままであった。

挿図２　「馬角」箱　（公財）静嘉堂蔵
＊箱蓋表中央に勝海舟筆「馬角」、両脇に小野湖山筆「奇彩千秋　霊光万古」



挿図３　『蔵品目録』（記念館本）　紙・墨書　12.2×33.2cm　松浦武四郎記念館蔵

最近、松浦家より岩崎家へ譲渡した時の目録と思しきものが静嘉堂内で見つかった。全文を翻刻し公刊すべき資料であるが、本報告では記念館本との比較や、関係資料との照合により、ひとまず武四郎旧蔵資料が岩崎家へ譲渡された時期やそれにかかわった人などについて明らかにしたい。

二、武四郎没後に編まれた旧蔵品目録について

『静嘉堂図録』や『内川目録』が指摘するように、静嘉堂所蔵の武四郎旧蔵品は収納箱に特徴がある（註6）。主要な箱はいずれも倹飩式の木箱で、蓋表には古物を賞翫した武四郎の知友が、それぞれ「馬角」「天地含章」「皇和宝銅」「静壽」「大雄小屈」などと墨書する。蓋を開けると抽斗があり、木箱等に入った複数の古物が収納される、といった具合である。例えば、先述の大首飾など玉類を収納する箱には、蓋表に「馬角」「奇彩千秋　霊光万古」とあり、蓋裏に明治十三年の勝海舟（一八二三～九九）、小野湖山（一八一四～一九一〇）の款記がある【挿図2】。この他、単独の箱に入ったものを含め、武四郎旧蔵品の多くが同様の箱書を伴う。そのため、武四郎没後に編まれた目録も、基本的に箱ごとに分類、立項されている。以下、武四郎没後に編まれた武四郎旧蔵品目録の概要を記念館本、土器目録、新出の静嘉堂本の順に記す。

『蔵品目録』（記念館本）【挿図3】
写本、紙・墨書、一冊。成立年代、筆者未詳。武四郎の生家に伝来、現在武四郎記念館所蔵。半紙二つ折り横長使い、こより綴。表紙共紙。題はなく、

挿図４　『目録』（松浦武四郎旧蔵品）　紙・墨書　12.5 ×34.0cm（公財）静嘉堂蔵
上段：同１丁オ　下段：８丁ウ９丁オ

表紙

『蔵品目録』は任意の名称である。内容は、「馬角」「天地含章」「皇和宝銅」「古銅器類」「文房具並経文類」「神仏像類」「陶器」「埴物類」「石器類」「武器類」「幅之部」「古塗物」「雑類」の十三項目をたて、それぞれ古物の名称と員数、出土地などが墨書される。本文十六丁。一二・二×三三・二cm。

『土器目録』一〇八函二九架

写本、紙・墨書、一冊。成立年代、筆者未詳。（公財）静嘉堂蔵。静嘉堂文庫の用箋（紙本墨摺、半面十行）に墨書。ホチキスどめ紙製本。表紙は別紙で「土器目録」と題あり。内容は単独の箱に収められた古物の名称と員数、箱書の全文である。従って他の目録と重複がある。また土器以外の古物、例えば江戸時代後期の大坂の文人たちの箱書が充実した奈良・久米寺の「木鬼面」や、向山黄村（一八二六～九七）の箱書により狩谷掖斎（一七七五～一八三五）から柏木貨一郎（一八四一～九八）の手を経たことが知れる「無垢浄光経陀羅尼」なども掲載され、箱書の記録が重視される。「土器目録」は用箋や書風、掲載数が三十点程度であることから、静嘉堂文庫で昭和中期に作成したものではないかと推測される。本文十六丁。二七・二×一九・〇cm。

『目録』（静嘉堂本）【挿図４】

写本、紙・墨書、一冊。（明治二十三年）三月二十一日成立。（公財）静嘉堂蔵。半紙二つ折り横使い、紙紐綴。共紙表紙に「目録」と題あり。虫損補修され表紙に間紙を入れ補強する。松浦一雄より岩崎家へ武四郎旧蔵品を譲渡する際に作成された目録と推測される。「馬角」「天地含章」「皇和宝銅」「古銅器」「静壽」「龍宮秘典」「大雄小屈」「古量」「陶器」「埴物類」「石器類」「武器類」「書画第一部」「書画第二部」「化蝶」（註7）の十五項目からなり、それぞれ古物の名称と員数、出土地などが墨書され、項目ごとに作品に通番号を付し、末尾に合計点数と金額を記す。馬角より書画第二部までの総点数は三三一点とあるが、古銭の点数は記されない。巻末に総数総額を記し宛名と日付を記す。本文三十七丁。一二・五×三四・〇cm。

挿図５　『目録』(松浦武四郎旧蔵品)　上段：24丁ウ25丁オ　中段：同25丁ウ26丁オ　下段右；同37丁ウ
下段中：25丁オ部分より朱印３種　下段左：26丁オより「掖斎」印、「愛鵞堂」印

三、静嘉堂所蔵『目録』(松浦武四郎旧蔵品)の特徴と成立時期

静嘉堂本は体裁、立項の仕方や順序、古物の名称と員数、出土地等が記される点など、大枠では記念館本と共通するものの、情報量に大差がある。まず、静嘉堂本の方が項目数が二つ多い。うち一つは、分類表現の違いにすぎないが、静嘉堂本で全体の約三分の一を占める古銭類が記念館本には全く無い。また記念館本では「静壽」と「大雄小屈」の箱書名はみられず、前者は「文房具並経文類」、後者は「神仏像類」と、内容自体が立項される。そして静嘉堂本では「静壽」、「龍宮秘典」を別項目としているところ、記念館本では「文房具並経文類」としてまとめている。さらに静嘉堂本は、項目ごとに、項目内の古物一つ一つに「第一」、「第二」、と番号を付し、個数の合計を記す。例えば一丁表より「馬角」と収納箱の箱書が記され、「第壹／一首掛　一連」と、収納された作品に番号を付し、その名称を記す。番号には朱の丸印が付される。次いで作品を構成する玉や環などを一つ一つに「一金環　一個／一銀環　五個…」とまとまりごとに個数の合計が記され、最後に金額が記されるといった具合である【挿図5】。これに対して記念館本には、項目ごとの合計点数や金額が書かれることはない。また基本的に連番が付与されることはなく、例外的に「幅之部」のみ、作品名の右肩に小番号が付されるが、番号は飛び飛びである。

そして、最も重要な点は、本目録には左記の通り宛名があることである。

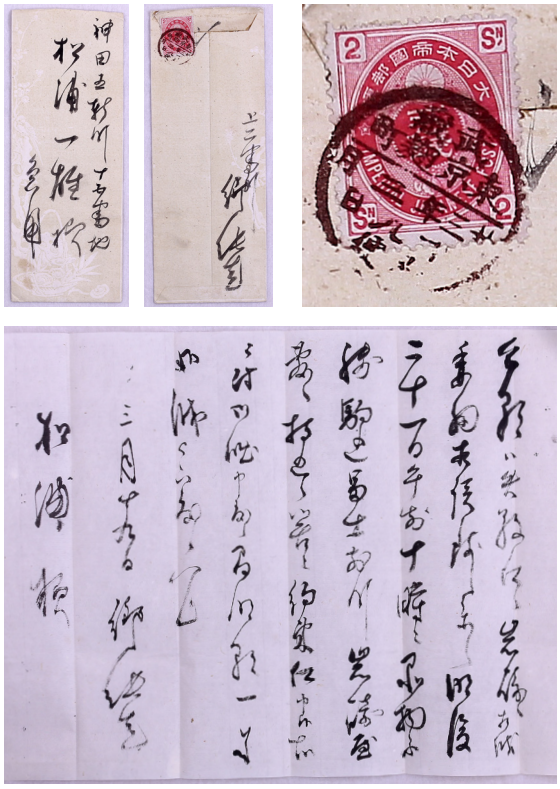
「右者正ニ確収仕候也／松浦一雄／代印須永達「須永」(朱文方印)／三月
廿一日／岩崎様」

即ち、年代はないが、本目録は、武四郎の嗣子・松浦一雄が、代理人として須永達をたて、岩崎家に武四郎旧蔵品を譲渡した時の目録であろう。収入印紙からも、本目録は武四郎没年である明治二十一年以降、彌之助存命中の明治二十から三十年代頃のことと推測される。

さらに、武四郎記念館館長の山本命氏のご教示により、静嘉堂本の成立年代、つまり武四郎旧蔵品が岩崎家に入った年月日が明らかとなった。東京の松浦家に伝来し、現在、武四郎記念館が所蔵する初公開の小野江松浦家文書N9-12-25 松浦(一雄)宛郷純造書簡(明治二十三年)三月十九日付【挿図6】である。

【封筒】表：神田五軒町十五番地／松浦一雄様／急用
裏：上二番町／郷純造
※二銭切手消印「武蔵 東京麹町 廿三年三月十九日 ■便」
【本文】今朝ハ失敬仕候、岩崎へ相越／委細相談致し参候、明後／二十一日午前十時ニ、品物不／残駒込富士前町岩崎屋／敷へ持込候筈ニ約束仕申候、右／ニ付御咄申度候間、明朝一寸／御越被下度候、以上／三月十九日　郷純造／松浦様

本書簡の差出人である郷純造（一八二五～一九一〇）は美濃（岐阜）の人で、大蔵省で活躍、明治十九年に大蔵次官、二十四年には勅選貴院議員となった。現在、根津美術館が所蔵する芸阿弥「観瀑図」の旧蔵者でもある（註8）。この郷純造の四男、昌作は、二歳で岩崎彌太郎（一八三五～八五）の養子となり、岩崎豊彌（一八七五～一九二六）と改名している。いうまでもなく、彌太郎は彌之助の兄であるから、彌之助にとって、豊彌は甥にあたる。因みに松浦一雄は彫金家で明治政府の依頼で新貨幣を制作した加納夏雄（一八二八～九八）に師事し、明治二十年頃まで大蔵省造幣局に勤務している（註9）。



挿図6　「小野江松浦家文書」史料番号N9-12-25
「（書状、委細相談は21日午前10時に駒込富士前町岩崎屋敷へ持込みの約束につき）」
上段：左より封筒表・封筒裏・同消印、下段：本文

即ち、明治二十三年三月十九日の消印のある郷純造の書簡は、郷が岩崎家と相談し、駒込富士見前町の岩崎屋敷、つまり岩崎本家（当時の当主は彌太郎の長男・久彌（一八六五～一九五五）だが、自身の四男を養子に出した家）に、三月二十一日午前十時にすべての「品物」を持込むことの約束をしたので、松浦一雄に話したいことがあるから、明日（二十日）の朝に来て欲しい、というものである。白絵具で蝋箋風に梅や太湖石、霊芝などが描かれた文人趣味の封筒に「急用」と記された通りであったことがわかる。

このことから、本目録に記された武四郎旧蔵品は、武四郎の三回忌を終えて間もない明治二十三年三月二十一日に、岩崎家といっても実質的には当時三菱二代社長であった彌之助が、一括で武四郎旧蔵品を購入したとみて間違いなかろう。

四、おわりに―静嘉堂本にみる二、三の疑問点

ところで、静嘉堂本が松浦家より武四郎旧蔵品を購入した時点での目録であるとすると、静嘉堂本にあって、記念館本にない、数々の朱印は何を意味するのだろうか。静嘉堂本では冒頭よりところどころに大小の朱の丸印、岩崎家替紋の朱印などが認められる。

察するに、前者は岩崎家がこれらを購入した後に捺した、蔵品整理や棚卸の際の確認の印のようにも思われる。また静嘉堂本と記念館本とでは、作品名の配列や、場合によっては作品が属する項目が変わっていることがあり、現状、箱書のある箱と中身との関係や、項目と内容の関係、番号の付与の仕方などからも、記念館本は何段階かを経た後の目録のようにも思われる。いずれにしても、これらの目録類と静嘉堂が現在所蔵する現物との照合をしたうえで、改めて検討したい。

ところで現物との付け合わせという点では、静嘉堂本にはさらに大きな疑問がある。現在、静嘉堂には大量の古銭群も収納箱もみあたらない。因みに武四郎記念館では、静嘉堂の古物の箱と同じ形式の箱に収納された古銭（金銀貨幣）がある（註10）。箱書は楊守敬による「古幣」と、木村二梅による「得

之以／為祥瑞」である。

また静嘉堂本の「化蝶」以下十二丁にわたり列記された頁にのみ「椹斎」、「愛鵞堂」と読める二種の朱文長方印が多数捺される点も特徴的である(註11)。武四郎の古物蒐集は古銭から始まったともいわれ、コレクター番付に載るほどであった。古銭類にみる「椹斎」の印は、江戸後期の考証学者・狩谷椹斎の旧蔵品、「愛鵞堂」の印は、幕末明治の古銭収集家として名をはせた服部仲(一八三三～一九〇一)の旧蔵品であることを示しているとみられることを付記しておく。

目録に掲載される古物や書画、書籍等が、現在どの程度静嘉堂に現存しているのか、また現存しないもので武四郎記念館等、他の所蔵先にあるものはないのか、等については、次号以降の課題としたい。

(静嘉堂文庫美術館　学芸員)

(註1)　吉田武三『評伝 松浦武四郎』松浦武四郎伝刊行会、一九六三年。

(註2)　『内川目録』は、研究代表者・内川隆志、科学研究費補助金(課題番号：二三二六〇一〇〇九、研究課題名「博物館における人文資料形成史の研究　静嘉堂文庫所蔵松浦武四郎旧蔵資料の研究と公開」、研究機関：國學院大學、二〇一〇～一二年)の成果であるという。またこの科研に当時の静嘉堂文庫の主任司書成澤麻子、主任学芸員長谷川祥子、学芸員山田正樹、同大橋美織が研究協力者として参加している。本研究以降、静嘉堂から見出された武四郎旧蔵品は、同様の調査が行われ、同等の基礎データが「好古家ネットワークの形成と近代博物館創設に関する学術的研究」(基盤研究B　研究課題番号17H02025　研究代表者　内川隆志)の報告書においてなされている。

(註3)　企画担当は筆者。同展図録『徹底分析「武四郎涅槃図」』の拙稿「画鬼・河鍋暁斎×鬼才松浦武四郎＝武四郎涅槃図」の挿図6～9は、武四郎旧蔵の天神画像、四八頁に掲載した土佐光重「天満宮神影」は、河鍋暁斎「武四郎涅槃図」中の武四郎の足元に座す束帯天神であるとして紹介した。挿図11に本作の箱と小野湖山による箱書の図を掲載したが、箱の作りは、後述の「馬角」などと同じ特徴を持つ。

(註4)　静嘉堂所蔵古写経群の研究資源化プロジェクト編『静嘉堂所蔵古写経群の調査と研究』二〇二四年。浦木賢治「静嘉堂所蔵古写経群の伝来―明治時代の松浦武四郎ほか」(『静嘉堂研究紀要』第二号、二〇二四年)

(註5)　拙稿「口絵解説「増壹阿鋡経　巻第二十二(善光朱印経)」(公財)静嘉堂蔵」『正倉院文書研究』二〇二五年八月。武四郎旧蔵の古写経が収納されていた箱「龍宮秘典」は、二〇二五年に静嘉堂内で再発見された。概要は以下の通り。「龍宮秘典海中探石室真言山處印(ママ)　壬午立春　老毅題」の墨書あり。縦四三・五cm、横四二・五cm、奥行三三・五cm、鍵付き倹飩式の木箱。箱書は明治十五年(一八八二)立春に、武四郎周辺の好古家の一人で儒者の鷲津毅堂(一八二五～八二)が、唐代の詩人・慧浄「雑言(義淨詩)」中の七言句を揮毫したもの。抽斗に「貝多」「北海翁」「惺吾」と墨書あり。「貝多」は貝多羅葉のことで経典を指す。「北海翁」は松浦武四郎のこと、「惺吾」は清末の文人・楊守敬(一八三九～一九一五)の字。楊守敬は明治十三年四月から四年間、駐日清国公使として滞在し、武四郎の親友の書家たち、巌谷一六や日下部鳴鶴らを通じて武四郎の古物を鑑賞、しばしば箱書をしている。抽斗の墨書も書風から楊守敬の書であろう。静嘉堂本「目録」との照合により、この箱が間違いなく武四郎旧蔵の古写経が入っていた箱であることが明らかとなった【挿図7】。

(註6)　成澤麻子「静嘉堂のコレクション―松浦武四郎コレクションの調査を終えて」(『静嘉堂蔵　松浦武四郎コレクション』二〇一三年)では「馬角」「天地含章」「皇和宝銅」「仙寵」「大雄小屈」の五箱が(文庫書庫内に)存在感をただよわせつつ置かれている、とあるが、「仙寵」は目録に無く代わりに「石器類」と立項される。目録での箱書立項は他に「静壽」(美術庫保管)、「龍宮秘典」である。

(註7)　「化蝶(げちょう)」とは銭の異名。古銭の目録。

(註8)　「郷家ホームページ」(https://www.gokej.jp/junzou/)で指摘される。売立目録『郷男爵家御蔵品入札』会場：東京美術倶楽部、大正八年十一月二十四日に「山水／月翁禅師、蘭波禅師、横川禅師賛／芸阿弥」が掲載される。

(註9)　山本命「古銭蒐集家としての松浦武四郎」(『好古家ネットワークの形成と近代博物館創設に関する学際的研究Ⅱ』二〇一九年所収)参照。因みに、『職員録　明治二十年(十二月三十一日現在)甲改正追加』中の大蔵省造幣局技手九段(上)に松浦一雄の名がある。

(註10)　ただし武四郎記念館所蔵の古銭は、東京の松浦家が家宝として何よりも大切にしてきたものであり、静嘉堂本には掲載されたものではないようである。

(註11)　前掲註9参照。山本論文中で紹介された「古銭摺本賛歌」(松阪市所蔵)に、静嘉堂本に捺されたものと同じ「椹斎」印、「愛鵞堂」印が捺されている。

挿図7　「龍宮秘典」箱
(公財)静嘉堂蔵

付記

本稿は二〇二四年度三菱財団人文科学研究助成金「現存古写経の書写と伝来―静嘉堂古写経群を中心に」の成果の一部である。執筆にあたり松浦武四郎記念館山本命館長より、未公開資料をご提示いただいたほか、多数のご教示を賜った。深謝申し上げる。

なお、翻刻を除き、本文では、原則、当用漢字に統一した。岩﨑についても「崎」を用いず「崎」とした。

【図版出典】挿図1、3、6は松浦武四郎記念館より提供を受けた。挿図2は(株)インフォマージュ、4、5、7は猪股謙吾氏の撮影による。